

いさわ



命と引き換えに村を守ったお銀にこの後奇跡が起きる

胆沢区に伝わる民話を題材にした奥州胆沢劇場「きつね火」は2月22日、胆沢文化創造センターで開かれ、2回公演合わせて約1500人が鑑賞しました。

25回目のことしのテーマは「愛」。藩政時代の胆沢の里山を舞台に、人間と動物の垣根を越えた愛を中心に物語が進みます。人間の世界に飛び込んだキツネの娘お銀は、気が優しい青年平三郎と幸せに暮らします。しかしある日、村が戦乱に巻き込まれ、お銀は家族やふるさとを守るため妖術を使い、自らの命を犠牲に――。舞台で展開される迫真の演技が、見ている人たちの感動と涙を誘っていました。

家族やふるさとを救った愛
奥州胆沢劇場「きつね火」

まちの話題



ことし20回の節目を迎えた全日本農はだてのつどい（いさわのまつり実行委員会主催）は2月14日、胆沢野球場で行われました。「農はだて」とは1年の農作業の始めの日に、その年の五穀豊穡と農作業の安全を祈願する伝統行事です。

日本最大級の巨大な臼（直径2.4㍎、重さ7㍑）でもちをつく「大臼福餅つき」は、20回記念で例年の倍の60㍑のもち米がつかれて振る舞われたほか、岩手・宮城内陸地震の「震災復興感謝なべ」として、300食分の「胆沢のすい豚」も提供され、会場を盛り上げました。

最大の見せ場「福俵引き」は、重さ8㍑の巨大な俵を引っ張る催し。雪不足で俵が思うように進まない場面もありましたが、約250人の厄年連の男女が力を合わせて綱を引く様子は迫力満点でした。

力を合わせて福を引き寄せ

20回を迎えた全日本農はだての集い



豊作や幸福を引き寄せようと厄年の男女が力を合わせる「福俵引き」

えさし

江刺りんごの30周年を祝う

J A岩手江刺が記念式典



生産者も多数出席した式典

江刺りんご共選共販30周年記念式典（J A岩手江刺など主催）は2月20日、ホテルニュー江刺イーズで開かれ、関係者ら150人が出席しました。

江刺りんごの歴史をひも解くと、昭和48年に小倉沢りんご生産組合（稲瀬）が全国初のわい化モデル園の1つとして設立され、先導的な役割を果たしました。その後各地でわい化りんご団地が造成され、生産基盤が確立。54年には旧江刺市内一円の共同選果、共同販売が始まり、徐々にその名声が高まってきました。

式典では、取り組みの報告や功労者への感謝状贈呈などが行われ、30年の歩みを振り返っていました。

豊作と安全願い家々を回る

黒田助地区でしし舞いの門付け

260年以上の伝統があるといわれ、市の無形民俗文化財にも指定されている「黒田助しし舞い」の門付けは2月11日、羽田町黒田助地区で行われました。

この日は、同保存会と黒田助会の会員25人が、家々や福祉施設などを訪問し、太鼓や笛の音に合わせて勇壮な舞を披露しました。舞は、悪魔になった獅子が家の中に入ろうとすると、太刀取りが退治する物語になっており、五穀豊穡や家内安全などを祈願して行われます。獅子舞が訪問した家や施設の人たちは、舞が終わった後に頭をかんでもらうなど、伝統行事を通じてことし1年の無病息災を祈っていました。



庭先で行われた獅子と太刀取りの舞

みずさわ

ころもがわ

平和を望んだ藤原氏の願い

4つの神楽保存会が熱演



藤原泰衡の首を確認する頼朝(右)

ことしで19回を数えるころもがわ神楽まつりは2月8日、サンホテル衣川荘で開催され、200人を超える観客が幽玄な舞台を鑑賞しました。

川東・大森・大原・川内の各保存会胴取による「寄せ太鼓」共演から始まり、衣川小学校6年生12人が神楽の基本の舞といわれる「み神楽」を披露。4つの保存会が場ごとにリレー形式で演じ、神楽まつり最大の見せ場となっている創作神楽では「夏草の賦」が舞われました。奥州藤原氏を滅ぼした源頼朝が、恒久平和を願った藤原四代の心に触れ奥州の平安を誓う場面が終ると、感動の大きな拍手が会場を包んでいました。

偉人の青春時代にスポット

小野寺博士題材に前沢劇場上演

第9回奥州前沢劇場「医仁のひと〜小野寺直助の青春〜」は3月1日、前沢ふれあいセンターで開かれ、昼・夜2回の公演で約1100人が鑑賞しました。

物語は、文化功労者で旧前沢町名誉町民第1号の医学博士・小野寺直助が題材。少年時代や旧制盛岡中学時代に焦点を当て、金田一京助や野村胡堂ら同級生との友情を中心に、笑いあり涙ありの物語として描かれました。約3カ月に及ぶ練習の成果を精いっぱい披露したキャストや、裏方で支えたスタッフ総勢120人による手作りの舞台に、観客は惜しめない拍手を送っていました。



同級生との友情をはぐくんだ青春時代

まえさわ